2021年度ロザリー・レナード・ミッチェル記念奨学金論文

(B) 活動・研究助成金 報告論文

“Rappaccini’s Daughter” における言葉とジェンダー

有馬　三冬

Key Words　アメリカ文学、言葉、毒、ジェンダー、流動化

はじめに

本論は、ナサニエル・ホーソーン（Nathaniel Hawthorne）の短編小説である「ラパチーニの娘――オベピーヌ氏の著作から」（“Rappaccini’s Daughter: From the Writings of Aubépine,” 1844）を取り上げ、作中で描かれる言葉と毒が互換可能な関係であることを示した上で、キャラクター間に生じる言葉の権威性をジェンダーの観点から考察する。ホーソーンの作家としてのキャリアの後期は『緋文字』（*The Scarlet Letter*, 1850）、『七破風の屋敷』（*The House of the Seven Gables*, 1851）、『ブライズデール・ロマンス』（*The Blithedale Romance*, 1852）、『大理石の牧神』（*The Marble Faun*, 1860）と意欲的な長編小説の出版が目を引くが、キャリア前期の1830年代から40年代は短編作品を数多く生み出している。そして、40年代半ばに出版された「ラパチーニの娘」は、ホーソーンが短編作品を中心に創作していた時期から長編作品中心へと移行する中間期の作品であるといえる。

このような過渡期にあたる作品である事実は、「ラパチーニの娘」が後の長編作品のプロトタイプであると考え得る可能性を示している。『緋文字』のヘスター・プリン（Hester Prynne）、『七破風の屋敷』のヘプジバー・ピンチョン（Hepzibah Pyncheon）、『ブライズデール・ロマンス』のゼノビア（Zenobia）、そして『大理石の牧神』のミリアム（Miriam）のように、ホーソーンは物語を駆動していく中心人物として女性キャラクターを描いている。ニーナ・ベイム（Nina Baym）が指摘したように、どのキャラクターも男性キャラクターたちのエゴイズムとそれに伴う冷酷さに曝され、残酷な運命と対峙することとなるヒロインたちである（Baym, 2004: 46）。このようなヒロイン像は、まさに「ラパチーニの娘」に描かれる主題であるといえる。理想的な美しさで主人公ジョヴァンニ（Giovanni Guasconti）を魅了しながらも、父親であるラパチーニ博士（Giacomo Rappaccini）の実験によって毒を身体に内包するベアトリーチェ（Beatrice Rappaccini）は、父と反目するバグリオーニ教授（Pietro Baglioni）の調合した「解毒薬」を口にして死に至る。ラパチーニの非人道的実験、彼を貶めようと画策するバグリオーニの陰謀、ジョヴァンニとのロマンスなど、ベアトリーチェが男性キャラクターたちの思惑の中心人物として展開するプロットは、ベイムの指摘するような「男性キャラクターたちのエゴイズムとそれに伴う冷酷さ」の犠牲となる女性

ありま　みふゆ，ARIMA Mifuyu：立教大学文学研究科英米文学専攻博士課程後期課程

キャラクターという構図を反映している。言い換えるならば、「ラパチーニの娘」とはホーソーンが後期の長編小説でさらに複雑に展開させていく「抑圧される女性」と男性キャラクターたちの関係性を、端的かつ象徴的に描いた作品なのである。ホーソーンの描く「抑圧された女性」のたどる悲劇的な運命は、たびたび男性作家である彼の女性嫌悪として指摘されており、作品批判の焦点となっている[1]。

他方、本論では、ホーソーンが「ラパチーニの娘」において「抑圧される女性」をどのように描いているのかについて分析しつつ、単なる女性嫌悪の表象に留まらない女性像を明らかにする。男性キャラクターたちの身勝手な行動の犠牲となるベアトリーチェの主体性の有無は、彼女の毒をどのように解釈するかに依拠しているといえるだろう。フェミニズムの文脈において、彼女のもつ毒は、女性的な魅力に満ちた美しいベアトリーチェの性的主体性や、男性への依存を棄却して自立した人生を確立させる女性の潜在性などが読み込まれることによって、男性支配を脅かす能力の象徴として解釈されてきた系譜がある[2]。あるいはラパチーニの策略によって毒を帯びることとなるジョヴァンニとベアトリーチェの「きょうだい」や、ベアトリーチェと毒を分け合う植物と彼女の姉妹関係に焦点を当てて、この作品の近親姦的なテーマをあぶり出す試みも為されてきた[3]。以上を踏まえ、本論では物語の核となるベアトリーチェの毒に注目し、先行研究では考察されてこなかった言葉とジェンダーの関係から主要キャラクターたちの分析を行いたい。

より具体的には、「ラパチーニの娘」において、ベアトリーチェの口から発せられる毒と言葉が相似的に描かれることによって、毒を持たない男性キャラクターたちの言葉がむしろベアトリーチェを害するという構図を明示する。まずベアトリーチェの毒と言葉（words）が語りのレベルで換喩として用いられていることを指摘し、毒を含意した言葉（words）がキャラクターどうしの関係の構築にどのように影響しているかを分析する。ここで明らかにしたいのは、身体的に毒をもったベアトリーチェよりも、ジョヴァンニの言葉の毒性が彼女を蝕み、有害に機能しているということである。次に、言葉で構築される噂や解釈が作中で拡散している描写に注目し、男性キャラクターによって解釈されるベアトリーチェがいかに彼らの言葉に毒されていくか、あるいは彼女自身の言葉の権威が棄却されているかを示す。最後に、一方的に解釈されるベアトリーチェをテクストと見なすことで、彼女が市場で同様に解釈される存在であるホーソーンの自己投影であることを指摘し、「抑圧される女性」を描くホーソーンのジェンダー観について分析する。ここでは「ラパチーニの娘」をホーソーンの置かれた文学市場の寓意として解釈したマイケル・ギルモア（Michael T. Gilmore）の議論を援用しながら、解釈を誘う存在としてベアトリーチェとホーソーン、さらに第二のベアトリーチェとして毒を帯びたジョヴァンニが描かれることを示し、最終的にホーソーンがジェンダーの二項対立を自ら流動化させていることを明らかにする。

1. 毒としての言葉

物語は、若く美しい青年であるジョヴァンニが、父の旧友であるバグリオーニ教授の勤めるパドヴァ大学で学ぶため、南イタリアの田舎からパドヴァへとやってくるところから始まる。ジョヴァンニの部屋はラパチーニの庭に隣接しており、アパートのオーナーと思われる老女リザベッタ（Lisabetta）に促され、彼は部屋から庭を眺めることになる。そこで植物の世話をするラパチーニとベアトリーチェの姿を見て、ジョヴァンニは美しい娘ベアトリーチェに強く惹かれる。しかし、ジョヴァンニは庭の植物が何かしらの毒をはらんでいること、植物の毒はベアトリーチェに対して悪く作用しないこと、そしてベアトリーチェは彼女に近づいた生き物を殺してしまう不思議な

力を有していることを知ってしまう。これらの不可解な出来事に不安を感じながらも、ジョヴァンニは彼女と親密になっていく。

言葉と毒の関係性は、ジョヴァンニが部屋の窓からベアトリーチェの様子をのぞき見ている場面で示されている。彼女の姿を初めて見たジョヴァンニは、ベアトリーチェが庭で一番毒性の強く美しい灌木に対して親しげに話しかけているところを目にする。

> "And gladly will I undertake it," cried again the rich tones of the young lady, as she bent towards the magnificent plant, and opened her arms as if to embrace it. "Yes, my sister, my splendor, it shall be Beatrice's task to nurse and serve thee; and thou shalt reward her with thy *kisses* and *perfumed breath*, which to her is as the *breath* of life."
>
> Then, with all the tenderness in her manner that was so strikingly expressed in *her words*, she busied herself with such attentions as the plant seemed to require…. (Hawthorne, 1974: 97, italics mine)

ここでは、ベアトリーチェが"my sister"と呼びかける灌木を抱擁し、口づけとかぐわしい息が欲しいと語りかけている。同じ毒を共有する両者の近親姦的な関係を想起させる描写である。さらに、ベアトリーチェの台詞の中に"kisses"や"perfumed breath"などの言葉が使われることで、口と毒のイメージが重ねられている。このようなベアトリーチェの台詞が、語りにおいて"her words"と置き換えられることによって、植物とベアトリーチェが共有する毒、とりわけ呼吸に含まれる毒性、そして口から発する言葉が連鎖的につながり、言葉と毒の互換性が構築されているのである。この連鎖はジョヴァンニが二度目にベアトリーチェの姿を見かけ、彼女に近づく生き物が死んでしまうことを目撃する場面でも反復される。ベアトリーチェは"Give me thy breath, my sister"と灌木に呼びかけ、"I am faint with common air! And give me this flower of thine, which I separate with gentlest fingers from the stem and place it close beside my heart"と、毒性のない空気が彼女にとって辛いことを示唆する。語りは"With these words, the beautiful daughter of Rappaccini plucked one of the richest blossoms of the shrub, and was about to fasten it in her bosom"と続き、彼女の台詞を"these words"と引き受けることによって、毒を帯びた呼気をわけあうベアトリーチェと灌木のイメージを言語的に代替し、毒と言葉の互換性を強化している（Hawthorne, 1974: 102）。

しかし、言葉は一貫して毒としてのみ働くわけではない。ベアトリーチェが危険な存在であると感じながらも、親密になっていくジョヴァンニは、彼女が科学について父親と同じくらい造詣が深いという噂の真偽について問いかける。ベアトリーチェはその噂を否定し、彼に対して"Believe nothing of me save what you see with your own eyes"と懇願する。ベアトリーチェは、"And must I believe all that I have seen with my own eyes?"と目で見たものに対する懐疑を示し、"Bid me believe nothing save what comes from your own lips"と言い直すように頼むのである（Hawthorne, 1974: 111-12）。ここで注目したいのは、ジョヴァンニが彼女の口から出たもの以外信じないように言って欲しいと頼むことである。さらに、ベアトリーチェはジョヴァンニの頼みを受け入れ、"If true to the outward senses, still it may be false in its essence. But *the words of Beatrice Rappaccini's lips* are true from the depths of the heart outward. Those you may believe!"と答える（Hawthorne, 1974: 112, italics mine）。このように、二人の信頼関係において視覚情報よりも言語的な意思疎通が重視され、ベアトリーチェの"words"の重要性が強調されているのである。ここでジョヴァンニは、ベアトリーチェの言葉を信じることによって、徐々に彼の心を蝕む彼女への恐怖を振り払おうとしている。この場面では、少なくとも、言葉がジョ

ヴァンニとベアトリーチェの親密性を強化する手段として機能しているといえる。

ただし、二人が絆を確認し合うこの場面では、同時に言葉が毒性を帯びていることも示唆されている。次の引用は、ベアトリーチェが自分の言葉を信じるようにと（彼の意に従って）ジョヴァンニに命じたすぐ後の語りである。

> A fervor glowed in her whole aspect, and beamed upon Giovanni's consciousness like the light of truth itself. But while she spoke, there was a fragrance in the atmosphere around her, rich and delightful, though evanescent, yet which the young man, from an indefinable reluctance, scarcely dared to draw into his lungs. It might be the odor of the flowers. Could it be Beatrice's breath, which thus embalmed her words with a strange richness, as if by steeping them in her heart?（Hawthorne, 1974: 112）

ここでは、ベアトリーチェからかぐわしい香りがしたが、ジョヴァンニはなんとも言えない気持ちから肺に吸い込むのをためらったと説明される。花のような香りとは、ベアトリーチェが灌木から花を一輪切り取っていた行為が示唆するように、すなわち毒を意味する。つまり、肺に吸い込むことをためらったジョヴァンニの行為は、ベアトリーチェの毒を取り込むことの回避であるといえる。ただし、この語りはジョヴァンニの無意識と語り手の作為的な表現の両方に注目して考える必要がある。まずジョヴァンニに注目すると、彼は物語冒頭でベアトリーチェが生き物を殺してしまう光景を目撃しているため、この場面で無意識的にベアトリーチェと毒を結びつけ、拒絶したと考えることができる。このような態度は、後に触れるように、ジョヴァンニが最初からベアトリーチェに対する「懐疑的な読者」であることを明らかにしており、すでにバグリオーニの解釈に迎合する下地が出来上がっていたのである。また、語り手に注目すると、“Could it be Beatrice's breath, which thus embalmed her words with a strange richness, as if by steeping them in her heart?”という最後の文章に特に表れているように、語り手の主観的な視点が強調されている。ベアトリーチェの吐息が彼女の言葉を香気で満たしたという表現は、再び毒・呼吸・そして言葉のイメージの連続性を提示している。このイメージが、ジョヴァンニに対するベアトリーチェの主張を曖昧にする。イメージの連続性は語り手の操作であるため、語り手はベアトリーチェに同情的な眼差しを向けるような素振りを見せながらも、その実彼女の言葉の信用を揺るがしている。ここでは、ベアトリーチェの言葉の重要性をベアトリーチェとジョヴァンニが確認し合う一方で、ジョバンニと語り手は共に彼女を疑う男性キャラクターとして共謀関係にあることが露呈しているのだ。

二人の親密性を構築していた言葉は、彼女の死の直前になると、二人の関係を壊す決定的な要因となる。彼女の死の直接的な原因は、バグリオーニがジョヴァンニを誘導してベアトリーチェに渡した解毒剤ではあるが、彼女をひどく傷つけるのはジョヴァンニの言葉であると考えられる。ここで重要なのは、毒を感染させていくことが示唆されていたベアトリーチェではなく、ジョヴァンニの言葉が毒のように働いていることである。ベアトリーチェの毒によってジョヴァンニの身体が蝕まれ、近づく生き物を吐息で殺す能力が芽生えていると気づいた結果、ジョヴァンニは彼女を“Accursed one”と呼び激しく罵倒し、その言葉は“with venomous scorn and anger”と語り手に説明されている（Hawthorne, 1974: 124）。この罵倒がすぐさまベアトリーチェを傷つけるわけではなく、“The force of his words had not found its way into her mind; she was merely thunderstruck”と表現されるが、最終的に彼女が“Thy words of hatred are like lead within my heart”と悲しみを表すことは、ジョヴァンニの言葉の有毒性が徐々に彼女を蝕んでいく時間経過として解釈することができる（Hawthorne, 1974: 124, 127）。対照的に、ベアトリーチェが解毒薬を口にする場面は詳しく描か

れず、ジョバンニに向けた台詞が終わると、すぐさま地に伏して息を引き取ったという語り手の簡潔な説明に留まる。ジョヴァンニの言葉がベアトリーチェの心に浸透していく時間経過と、解毒薬を口にしてから間もなく物語が締めくくられる早急さの対照もまた、ジョヴァンニの言葉の毒性がベアトリーチェの死の要因となることを際立たせている。

ジョヴァンニがベアトリーチェを罵る際に使う"accursed"という言葉は、実は彼自身にも向けられている。自分の息のかかった蜘蛛が死んでしまう姿を見て、彼は自分が呪われていると考え、"Accursed! Accursed!"（Hawthorne, 1974: 122）と嘆く。同様にベアトリーチェのことを"Accursed one"と呼ぶが、ベアトリーチェが"[W]hy dost thou join thyself with me thus in those terrible words? I, it is true, am the horrible thing thou namest me. But thou!"（Hawthorne, 1974: 124）と答えることは重要である。彼女が指摘するように、彼は自ら"accursed"という言葉で自分とベアトリーチェの連帯を生み出しているのである。この"accursed"という言葉は、呪われた状態を意味する。さらに*The Oxford English Dictionary*によると、「呪い」を意味する"curse"は"An utterance consigning, or supposed or intended to consign, (a person or thing) to spiritual and temporal evil, the vengeance of the deity, the blasting of malignant fate"と説明されている[4]。ジョヴァンニとベアトリーチェが呪われたと彼自身考えること、つまり、彼が毒を「呪い」と表現することは、毒と言葉の間の重複するイメージを言語的に強化している。このような男性の言葉の毒性が、物語を破滅的な結末へと導く要因となっているのである。

2. ベアトリーチェを蝕む解釈

毒として他者に感染する言葉は、ベアトリーチェとジョヴァンニの関係の中に留まらない。この作品における言葉と毒について考える上で、言葉によって構築された「解釈」の伝播についても目を向ける必要がある。ジョヴァンニの父の古い友人であり、彼の通う大学の教授として登場するバグリオーニや、ベアトリーチェの噂をする街の人々、そしてベアトリーチェの父ラパチーニは、それぞれベアトリーチェに対して一方的な解釈を行っている。言葉によって構成された噂や解釈は、伝播し共有される。ここで重要なのは、そのような解釈の共有をするのが、すべて男性キャラクターの間で為されているという点である。ベアトリーチェについての伝聞が広まっている状況は、庭で姿を見かけたベアトリーチェに惹かれるジョヴァンニの恋心を察して、バグリオーニがからかい混じりに語る中で示されている。バグリオーニによると、ベアトリーチェの姿を見た者はほとんどいないにもかかわらず、"all the young men in Padua"はベアトリーチェに夢中であるという（Hawthorne, 1974: 101）。解釈される存在としてベアトリーチェを考えるとき、彼女を解釈する側に立つキャラクターがすべて男性であり、彼女の噂をする不特定多数の人々までが「若い男性」と書かれていることは、ホーソーンが言葉の権威とジェンダーの関係を意識的に物語化していることを示している。

この作品で最も解釈の共有を拡大させている人物がバグリオーニである。バグリオーニの言葉は、ベアトリーチェが有害でジョヴァンニを堕落させるかもしれないとジョヴァンニが考えるきっかけとなる。バグリオーニはジョヴァンニに、かつてアレキサンダー大王に捧げられたという美しい女性の物語を話して聞かせ、ベアトリーチェへの疑念を掻き立てる。バグリオーニは、逸話の女性が生まれた時から毒で育てられ、毒が彼女の一部となり、愛と毒が一体となっていると語る。彼女の特徴は"rich perfume of her breath"（Hawthorne, 1974: 117）であり、ジョヴァンニにも読者にもベアトリーチェを想起させる。バグリオーニと会った後、ジョヴァンニは彼の息が部屋にいた蜘蛛を殺すのを見て、ベアトリーチェが物

語の女性のように邪悪であるというバグリオーニの考えを信じ、愛の代わりに恐れと憎しみを抱く。注目すべきは、ジョヴァンニのベアトリーチェに対する憎しみが、バグリオーニの彼女に対する解釈、そしてそれをうけたジョヴァンニの解釈によって形成されていることである。バグリオーニはベアトリーチェについてほとんど知らないにもかかわらず、ベアトリーチェの置かれている状況を一方的に解釈し、彼女の身体が毒によって構成されているために彼女は邪悪であると断定している。

ジョヴァンニはバグリオーニの解釈を自分の経験に従って真実として内面化する。たしかにベアトリーチェは“[T]hough my body be nourished with poison, my spirit is God's creature, and craves love as its daily food”(Hawthorne, 1974: 125)と述べており、自身の毒を認めてはいるが、意図的に生き物を傷つけるような描写はなく、彼女自身も内面の邪悪さは否定している。自分の言葉を信じてほしいとベアトリーチェが訴えるにもかかわらず、ジョヴァンニは毒をもったベアトリーチェを邪悪な存在と解釈し、バグリオーニの解釈と一致させる。ここに、女性であるベアトリーチェの言葉は信用せず、男性かつ大学教授という権威性をもったバグリオーニの言葉の方が重視されるというジェンダー的偏差が見て取れる。このジョヴァンニとバグリオーニの男性間の共犯関係は、ジョヴァンニと語り手の共謀を思い起こさせる。すでに触れた通り、ベアトリーチェと親密になるなかで、「彼女の言葉だけを信じるように命じて欲しい」と自ら望んだジョヴァンニは、彼女の言葉と共に感じたかぐわしい香りを吸い込まないようにしている。この反応は、言葉のやり取りの上での親密さとは裏腹に、毒に対する疑念や恐怖が付きまとっており、毒と言葉の一体性が繰り返し示される作中においてジョヴァンニは自家撞着を起こしている。ゆえに、ジョヴァンニはバグリオーニの言葉に感化されるという側面をもつと同時に、その解釈に迎合するような「公平ではない読者」として描かれている。ジョヴァンニは、ベアトリーチェへの愛と疑念に揺れ動くキャラクターではあるが、実際には最も他の男性キャラクターとの連帯を築きながらベアトリーチェを糾弾する人物である。

バグリオーニは、自分の言葉でジョヴァンニを感化し、最終的にはベアトリーチェに対して解釈を共有する共犯関係を築くだけでなく、彼女にまつわる街の噂を物語に持ち込む役割も担っている。ベアトリーチェについて知りたがるジョヴァンニに対してバグリオーニは、ほとんどの若者がベアトリーチェに会ったことはないが、みな彼女に夢中になっていること、また彼女が父親から科学の手ほどきを受け、教授になり得るほど深い知識をもっていることを明らかにしている(Hawthorne, 1974: 101)。この彼の言葉は、ふたつの事を示している。ひとつは、庭の外へと出られないベアトリーチェが、物語に登場しない人々、それも男性に一方的によく知られているということである。言い換えるならば、ベアトリーチェは、彼女がどう思っているかに関係なく、町の人々から解釈される状況にある。もうひとつは、それらの解釈が事実と正確に一致していないということである。すでに確認した通り、ベアトリーチェは彼女の科学の才能を否定し、それゆえジョヴァンニに彼女の言葉だけを信じてほしいと頼んでいる。この噂の否定は、制御不能に拡散していく恣意的な解釈をベアトリーチェが押し付けられている状況を強調している。

つまり、ベアトリーチェの毒が邪悪な性質を示唆しているという考えは、バグリオーニの解釈であり、それはジョヴァンニとベアトリーチェの親密な関係の外側にいる他者によって提供されたもののひとつにすぎないのである。ジョヴァンニは、彼の身体が変質するという理解不能な経験をその解釈が裏付けるために、それを真実であると見なす。ベアトリーチェが特異な力をもっているという事実自体は、ラパチーニによっても認められている。ラパチーニは彼女の毒を“marvellous gift”(Hawthorne, 1974: 127)と呼び、周囲の悪に対して抗うことのできる「力」だと考えてい

る。しかし、ラパチーニはそれ以上のことを説明しない。彼はたしかに彼女の身体に毒性を付与したが、彼女のすべてを理解しているわけではないのである。この結末に対して、アンソニー・セルリ（Anthony Cerulli）とサラ・ベリー（Sarah Berry）は本作品を医学的イデオロギーの対立の物語として捉えた上で、バグリオーニとラパチーニの勝敗を曖昧にすることにより、権威をめぐる男性間の争いの有害性を表しているのだと主張している（Cerulli and Berry, 2014: 120）。そうだとするならば、害のある「毒」とはベアトリーチェではなく、むしろ彼女を取り巻く男性側が帯びることになる。両者のイデオロギーを実践的に戦わせる場として選ばれたのがベアトリーチェの身体であり、彼女を有害と見なして排除するかどうかは学術的権威をもつ男性キャラクター、バグリオーニとラパチーニの決定に委ねられてしまう。

しかし、ベアトリーチェを解釈する存在として不特定多数の男性まで含められていることから、医学的権威をもつ2人の解釈が特権的ではないことも明らかである。「毒」は権威的男性のみならず、彼女を取り巻く男性キャラクターすべてに付与されている。そして、街の人々と同様に、ベアトリーチェに会ったことがないにもかかわらず彼女の有害性を断定するバグリオーニや、ベアトリーチェと接しながらも彼女の声を聞かないラパチーニの解釈は、無責任さを伴っている。その一方で、ジョヴァンニはベアトリーチェへの信頼と疑念に揺れる人物ではあるが、最終的にベアトリーチェの言葉を拒絶するため、彼女を一方的に解釈する他の男性キャラクターたちと共犯関係になる。結局、ベアトリーチェが何を考えているのかを誰も理解しようとしないため、彼女が悪魔なのか天使なのかという問いは解決しないのである。この問いは、彼女の毒をどのように解釈するか、つまり「毒とは何を意味するのか」に依拠している。

3. テクストとしてのベアトリーチェ、ホーソーン、ジョバンニ

他人から一方的に解釈されるベアトリーチェの立場は、不特定多数の読者から解釈されるテクストを想起させる。作中で執拗に繰り返される言葉（words）と毒の互換性は、ベアトリーチェがテクストの比喩である裏づけとなるだろう。このように考えるとき、「男性キャラクターたちによって解釈されるベアトリーチェ」という明白なジェンダー構図と、「読者によって解釈されるテクスト」という構図が重なり合う。そして、ベアトリーチェとテクストが重複する要因となっているのは、ベアトリーチェの身体の帯びる毒の寓意性にある。寓意的表象である毒がジョヴァンニをはじめとする男性キャラクター、そしてこの物語の読者の注意をベアトリーチェに引きつけ、彼女に対する解釈を誘うのである。

「ラパチーニの娘」における寓意の問題は、作者であるホーソーン自身によって物語の直前に付された序文から提起されている。序文において、語り手はこれから始まる物語が外国の文筆家であるオベピーヌ（Aubépine）によって書かれたものであること、彼がフランスではよく知られた作家であるものの、その作品の特徴から大衆に受け入れられにくいことを明らかにする。その理由は、作品の内容が寓意的でありすぎるためであると語り手が注釈する（Hawthorne, 1974: 91）。一方で、語り手は読者に対して、寓喩をどう解釈するかが作品の魅力を決定するため、寓意的な表象に注意を払うように促す。語り手は、読者が“the proper point of view”から正しく作品を読むならば楽しめるが、そうでないならばナンセンスにしか見えないだろうと述べ、作品の価値が読者に依拠することを強調するのである（Hawthorne, 1974: 92）。

このような序文の主張は、第一に作品に対するホーソーンの自己弁護であるといえる。ホーソーンの作品の価値を理解できない読者は、“the

proper point of view”から読むことのできない読者であるという批判的態度が透けて見える。それと同時に、ホーソーンは読者の解釈の方向性を冒頭からコントロールしようとしている。このような誘導は、主にベアトリーチェ、ジョヴァンニ、バグリオーニ、ラパチーニという限られた登場キャラクターで展開する物語の背後にどのような文脈を読み取るべきなのかという、読者の能動的な考察を促す。しかし、ホーソーンの過剰な寓意性は、ビヴァリー・ハヴィランド（Beverly Haviland）やジョン・ミラー（John N. Miller）らによって検証され、あまりにも誤った導線が多く、物語の内部で矛盾が生じていると批判されている。このような指摘は、ホーソーンが寓意的表現を多用した結果、読者が一貫した意味を特定することができなくなっていることを示している。

しかし、寓意的な物語を戦略的に展開するホーソーンと、彼の戦略が一貫した意味に収斂しないという批判は、なぜ「ラパチーニの娘」という作品に寓意的表現が満ちているのか、というさらなる問いを提起するように思われる。このような一貫した意味に変換できない解釈の分散とは、まさに作中でベアトリーチェの身に起きていることだからだ。読者はベアトリーチェをめぐる寓意的な物語に決定的な意味を見いだせないように、ジョヴァンニ、バグリオーニ、ラパチーニ、さらに彼女を噂する街の人々は、互いの解釈に影響されながらも、それぞれ彼女に対する己の考えをもっている。しかし、どの考えもベアトリーチェを「正しく」反映しているとはいえない。したがって、他人から一方的に解釈されるベアトリーチェは、読者から解釈されるテクストのように機能している。ベアトリーチェの身体が対立する医学イデオロギーの闘技場となることをセルリとベリーが指摘したように、テクストのように解釈されるベアトリーチェは不特定多数の男性の眼差しに曝されて考察される場として描かれている。

ギルモアは市場と文学の関係という観点からこの作品を検証しており、キャラクターたちをホーソーンの直面する現実、すなわちベアトリーチェがホーソーンの作品、ジョヴァンニが一般読者、ラパチーニが超絶主義者、バグリオーニが人気作家に対応すると論じている（Gilmore, 1988: 63）。彼の議論において、ベアトリーチェという作品を解釈するのはラパチーニとバグリオーニ、そして語り手の3人であり、物語そのものが語り手の解釈であると見なすことによって、語り手とホーソーンの視点を等しいものと考えている。さらに、彼はベアトリーチェの抱える外見と内面の不一致に言及し、彼女を解釈する立場にある恋人ジョヴァンニにホーソーンの一般読者への願望が投影されていると論じる。この作品がホーソーンの置かれた文学市場の寓意であると見なし、一般読者の代表であるジョヴァンニが誤読によってベアトリーチェを殺すことは、ホーソーンの作品を注意深く読まない一般大衆への不満を表していると結論づけるのである（Gilmore, 1988: 67）。

しかし、この作品を言葉や解釈のもつ毒をジェンダー化した物語として読む本論の文脈に沿うならば、語り手とホーソーンを同一視するギルモアの議論は不充分であるように思われる。なぜならば、最終的にベアトリーチェを邪悪であると解釈するジョヴァンニを批判的に描く語り手の眼差しも、男性キャラクターによるひとつの解釈の提示にすぎないといえるからだ。ゆえに、ホーソーンがどのように物語を語っているかについては慎重に考える必要がある。ブライアン・ハーディング（Brian Harding）は、オックスフォード版の注釈において、ホーソーンの妻であるソフィア（Sophia Amelia Peabody Hawthorne）がベアトリーチェの性質は美徳か邪悪か尋ねたときに、ホーソーンは“No idea”と答えたと指摘している（Hawthorne, 1987: 379）。この注釈を踏まえると、ホーソーンは誤読への非難というよりも、むしろひとつの「真実」を描き出す媒体としてテクストの抱える困難と向き合っていると考えられる。

「真実」をどのように描くかはホーソーンにとって重要なテーマであったといえるだろう。彼の長編小説『緋文字』では、ヘスターの胸に緋色の

糸で刺繍されたAの文字が、姦通者（Adulteress）を意味するだけでなく、有能（Able）や天使（Angel）などさまざまな含意のあるイニシャルに変わっていく。それは、ヘスターという人物をどのように周りが解釈するのかという問題と不可分であり、Aの文字が表す「真実」の不確定性は「ラパチーニの娘」で描かれるベアトリーチェの毒と同質のものであるに違いない。さらに、『七破風の屋敷』では、内面と外面の不一致を抱えるキャラクターとしてジャフリー・ピンチョン（Jaffrey Pyncheon）が登場する。ベアトリーチェが邪悪と見なされる毒と純真な精神という齟齬を抱えているように、彼は慈悲深いと形容される顔と邪悪な精神をもっているが、その内面はダゲレオタイプによって暴露されることとなる。しかし、実際に彼が周囲の信頼を得て、指導者的立場を獲得していることもまた事実である。ダゲレオタイプに加えて、この作品には絵画や原稿、いくつかの伝説や噂といった多様なメディアが登場するが、そのどれもが部分的な「真実」のみを反映している。結局のところ、ジャフリーの内面と外面の不一致を充分に説明する解釈は提示されず、ホーソーンは善悪どちらか一方にあからさまな権威を与えているわけではない。むしろ、調和しない性質そのものを描いているといえる。

この「真実」をどのように捉えるかという問題は、「ラパチーニの娘」にも組み込まれている。毒をもつベアトリーチェを邪悪な存在と見なすバグリオーニやジョヴァンニとは対照的に、語り手は "There is something truer and more real than what we can see with the eyes and touch with the finger"（Hawthorne, 1974: 120）と述べ、彼らの見解を否定するような素振りを見せる。ここで語り手は、見たり触れたりすることでは捉えられない真実の領域を示唆することで、ベアトリーチェが天使のような存在であることを主張する。しかし、語り手とホーソーンを切り離して考えるならば、このような語り手の主張も解釈のひとつであり、真実を表していることにはならない。加えて、語り手は語りの位相において、ジョヴァンニと共謀してベアトリーチェの言葉の信頼を揺るがすような記述をしていたことも既に指摘した通りである。よって、語り手は全能の視点から公平に物語を展開しているのではなく、ベアトリーチェに言葉の毒性を向ける男性キャラクターのひとりであり、「真実」を部分的にしか捉え得ないメディアのひとつにすぎないのだ。

このように、ホーソーンは「真実」をどのように捉えるかという問題に対して明らかに関心を持っているが、彼は同時にその不可能性にも意識的である。そのため、彼は「真実」を追い求める過程に焦点を当てている。ベアトリーチェは、「真実」――彼女は何なのか、あるいは彼女の毒は何なのか――を明らかにしたいという人々の欲望のために、テクストとして解釈される。テクストが絶対的で独占的な意味を持ち得ない一方で、あまり注意深くない読者はテクストが何かしらの真実や、それが何を意味しているのかという問いに対する答えをもっていると信じている。同様に、ベアトリーチェはテクストとして比喩的に機能しているため、自主的に自分について説明する機会をほとんど持たない。その結果、ベアトリーチェはそれぞれの解釈を通してのみ理解される。彼女が死の直前、"I would fain have been loved, not feared"（Hawthorne, 1974: 127）と言うように、彼女の創造主であり比喩的な作者であるラパチーニもまた、彼女のすべてを理解することはできていない。作品を書き上げた瞬間から作者も読者のひとりとなり、テクストは作者を含めた読者の解釈の対象となるために、誰にも制御することができなくなる。そのため、作者であるホーソーンはベアトリーチェを解釈する男性キャラクターたちの内のひとりであるといえる。しかし、同時に彼は、文学市場において解釈される存在でもあることを忘れてはならない。つまり、ホーソーンはベアトリーチェを解釈するジョヴァンニやバグリオーニ、ラパチーニでありながら、ベアトリーチェでもあるのだ。ホーソーンの作品の読者が作者ホーソーンを評価するという行為の中で、テクストと作家は延長線上に置かれ、ほとんど同一視

される。だからこそ、「ラパチーニの娘」においてテクストはベアトリーチェとして擬人化され、ホーソーン自身の姿が彼女に仮託されているのである。

テクストとしてのホーソーンは、序文の複雑な構造によっても示されている。そこでは、ホーソーンの代わりにオベピーヌが「ラパチーニの娘」の作者という役割を背負わされ、語り手によって紹介されている[5]。言うまでもなく真の作者はホーソーンであるが、オベピーヌ、語り手、そしてベアトリーチェ／テクストの作者ラパチーニと、ホーソーンの代理となるキャラクターが複数用意されていることは注目に値する。このようにホーソーンの存在を覆い隠すかのような序文の設定は、むしろ真の作者としてホーソーンを読者に意識させる。また、フランス語から英語という言語的変換、オベピーヌと翻訳者（序文の語り手）という語りの担い手の変化など、オリジナルの物語に読者が直接触れることができない設定によって、すでに解釈の歪みが生じている可能性が示唆されている。この重層性は、物語におけるホーソーンの意図がどこにあるのかを隠蔽することでもあり、隠蔽されたホーソーンを解釈しようとする読者の欲望は、ホーソーン自身によって誘われている。テクストとしてのベアトリーチェが「真実」をもつ者として解釈されるように、ホーソーンもまたテクストの「真実」を描く者として解釈される。この意味において、物語内で解釈を誘う存在であるベアトリーチェとメタ的に作品解釈へと参入するホーソーンは、同列の存在となるのである。

解釈する不特定多数の読者と解釈されるテクストの関係は、ジェンダーに置き換えられ物語化されているが、ホーソーンの物語は支配的な男性と抑圧される女性という単純な対比に留まらない。理由のひとつは、上述した通り、ホーソーン本人がベアトリーチェに重ねられているというジェンダーの交錯である。そしてもうひとつは、ホーソーン作品に通底する「男性キャラクターたちのエゴイズムとそれに伴う冷酷さ」の犠牲となる女性キャラクターの織りなす構図が、ジョヴァンニが次のテクストとなることを示唆する結末によって攪乱されるためである。毒の感染は第二のベアトリーチェになること、すなわちテクストの比喩になることを意味する。ジョバンニは、ベアトリーチェを抑圧する男性キャラクターの連帯の一員でありながら、最後にはベアトリーチェから毒に感染し、毒をもった身体に変質する。ベアトリーチェ亡き後、毒を帯びた存在はジョヴァンニだけとなり、彼は解釈される対象となるだろう。「ベアトリーチェの毒とは何なのか」という問いは「ジョヴァンニの毒とは何なのか」という問いへと移行し、彼の毒は人々の解釈を誘う寓意となるからである。

「ラパチーニの娘」は、複数の男性キャラクターたちによって解釈されるヒロインというホーソーンの典型的主題を展開しながら、抑圧される女性の立場が抑圧する側であった男性に引き継がれるという転換をみせる。読者に解釈されるホーソーン自身が投影されるベアトリーチェは、男性キャラクターたちに淘汰されながらも、彼らの一方的な解釈では完全に捉えられない存在として描かれている。そして、解釈に害されながらも解釈に絡め取られることに抗うベアトリーチェ／テクストの立場は、毒の継承によってジョヴァンニに引き継がれるのだ。ここで、権威的な男性像と抑圧される女性像という単純な二項対立が流動化している。ゆえに、彼女の人物像がホーソーンの女性嫌悪の反映として解釈するのは妥当であるとはいえない。むしろホーソーンは、解釈する側の男性キャラクターたちの限界を提示しているのであり、彼らもまた対象化され得る。ベアトリーチェを一方的に解釈する男性キャラクターたちの特権的立場もまた、テクストをめぐる解釈の関係性の循環に否応なく巻き込まれることによって、揺るがされているのである。

注

1　ベイム（2004）参照。

2　リチャード・ブレンゾ（Richard Brenzo）はベアトリーチェをケイト・ショパン（Kate Chopin）の『目覚め』（*The*

Awakening, 1899)、シルヴィア・プラス（Sylvia Plath）の『ベル・ジャー』（*The Bell Jar*, 1963)、テネシー・ウィリアムズ（Tennessee Williams）の『欲望という名の電車』（*The Streetcar Named Desire*, 1947）といった作品のヒロインたちの運命を先取りしていると指摘している（Brenzo, 1976: 164)。

3　オリヴァー・エヴァンズ（Oliver Evans, 1964)、ジョナズ・ナイトリー（Jonahs Kneitly, 2021）参照。

4　*Oxford English Dictionary*, 2nd ed., s.v. "curse."

5　Aubépine はサンザシ（Hawthorn）を意味する。

参考文献

Baym, Nina. 2004. "Revisiting Hawthorne's Feminism." *Nathaniel Hawthorne Review*, vol. 30, no. 1/2, pp. 32-55.

Brenzo, Richard. 1976. "Beatrice Rappaccini: A Victim of Male Love and Horror." *American Literature*, vol. 48, no. 2, pp. 152-64.

Cerulli, Anthony and Sarah L. Berry. 2014. "Nathaniel Hawthorne's Warring Doctors and Meddling Ministers." *Mosaic*, vol. 47, no. 1, pp. 111-28.

Elbert, Monica M, editor. 2018. *Nathaniel Hawthorne in Context*. Cambridge UP.

Evans, Oliver. 1964. "Allegory and Incest in 'Rappaccini's Daughter.'" *Nineteenth-Century Fiction*, vol. 19, no. 2, pp. 185-95.

Gilmore, Michael T. 1988. *American Romanticism and the Marketplace*. U of Chicago P.

Haviland, Beverly. 1987. "The Sin of Synecdoche: Hawthorne's Allegory against Symbolism in 'Rappaccini's Daughter.'" *Texas Studies in Literature and Language*, vol. 29, no. 3, pp. 278-301.

Hawthorne, Nathaniel. 1962. *The Scarlet Letter*. *The Centenary Edition of Nathaniel Hawthorne*, edited by William Charvat, Roy Harvey Pearce, and Claude M. Simpson, vol. 1, Ohio State UP.

————. 1965. *The House of the Seven Gables*. *The Centenary Edition of Nathaniel Hawthorne*, edited by William Charvat, Roy Harvey Pearce, and Claude M. Simpson, vol. 2, Ohio State UP.

————. 1971. *The Blithedale Romance and Fanshawe*. *The Centenary Edition of Nathaniel Hawthorne*, edited by William Charvat, Roy Harvey Pearce, and Claude M. Simpson, 3rd edition, vol. 3, Ohio State UP.

————. 1971. *The Marble Faun, or, the Romance of Monte Beni*. *The Centenary Edition of Nathaniel Hawthorne*, edited by William Charvat, Roy Harvey Pearce, and Claude M. Simpson, 2nd edition, vol. 4, Ohio State UP.

————. 1974. *Moss from an Old Manse*. *The Centenary Edition of Nathaniel Hawthorne*, edited by William Charvat, Roy Harvey Pearce, and Claude M. Simpson, vol. 10, Ohio State UP.

————. 1987. *Young Goodman Brown and Other Tales*, edited by Brian Harding, Oxford UP.

Kneitly, Jonahs. 2021. "Rappaccini's Queer Daughter: Gender Non-Conformity in 'Rappaccini's Daughter.'" *The Explicator*, vol. 79, no. 3, pp. 97-100.

Miller, John N. 1991. "Fideism vs. Allegory in 'Rappaccini's Daughter.'" *Nineteenth-Century Literature*, vol. 46, no. 2, pp. 223-44.

Roger, Patricia M. 1997. "Taking a Perspective: Hawthorne's Concept of Language and Nineteenth-Century Language Theory." *Nineteenth-Century Literature*, vol. 51, no. 4, pp. 433-54.